

## 清纯（風）お嬢様との甘くて臭いデート（加筆前 前半部分）

唐突だが、今日は俺——<sup>みどりかわ</sup>緑川サトルが通う宝陽学園の創立記念日である。そんな学園にとって特別な日は、俺にとっても特別な日になろうとしていた。現在、俺は待ち合わせ場所であるバス亭に立っている。

「そろそろか」

時計を確認すると、約束の時間まで後5分に迫っていた。

「ん？」

ふと背後に気配を感じた直後、視界が闇に包まれる。

それが誰かに目隠しされたのだと気付いた瞬間、

「むぐうっ!？」

今度は鼻を塞がれた。

間を置かず、強烈な腐卵臭が鼻の中へ流れ込んでくる。

この<sup>におい</sup>悪臭、間違いない。

「ごほっ、ごほっ、えほっ・・・!エ、エルゼか？」

「ふふふ、大正解です♪」

咳き込みながら問い掛けると、エルゼが嬉しそうに答えながら俺を解放する。

「待たせてしまったみたいなので、お詫びの握りっ屁です。気に入ってくれましたか？」

「できれば、もっと違うお詫びがよかった」

鼻にこびり付くオナラの残り香を感じながら、俺は控えめに抗議する。

「違うお詫び、ですか」

5秒ほど考えるような仕草をした後、

「じゃあ、こういうのはどうですか？」

エルゼが両手で俺の頬を包んでゆっくりと顔を近付けてきた。

「ちょっ、エルゼ!？」

俺の戸惑いを余所に、エルゼはどんどん顔を近付けてくる。

後3cmほどで彼女の唇が俺の唇に触れる。

そこまで来たところで、

「な～んてね。ビックリしましたか？」

エルゼはパッと顔を離し、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「・・・」

どうやら完全にからかわれたらしい。

「それにしても、本当にお待たせてしまったみたいですね。すみませんでした」

そう言うと、今度は申し訳なさそうに頭を下げてくるエルゼ。

「いや、さっき来たところだから気にしなくていいぞ」

「本当ですか？」

「ああ」

本当は 30 分ほど前から来ていたが、言わぬが花だろう。

「実を言うと、10 分ぐらい前からそこの物陰に隠れて、あなたを観察してたんですが……」

「何してんだよ！」

「冗談ですよ。でも、少なくとも 10 分は待っててくれたんですね」

「ま、まあな」

エルゼが嬉しそうな笑みを見て、怒る気が失せてしまった。

これが惚れた弱みというやつか。

「ほら、バスが来ましたよ♪」

ふいにエルゼが俺の腕に自分の腕を絡めてくる。

「っ!？」

腕に触れる柔らかい感触に、思わず息を呑む。

そんな俺を見て、エルゼは可笑しように笑っている。

こんな調子で、俺たちの初デートは始まった。

\*

俺が初デートの場所を選んだのは、待ち合わせ場所からバスで 30 分の所にある遊園地だった。

「遊園地なんて久しぶりです。でも、どうしてこっちの遊園地にしたんですか？近くにもっと大きな遊園地がありますよね？」

エルゼが少し不思議そうに問い掛けてきた。

依然として、その腕は俺の左腕に絡めたままだ。

「こっちの方が空いてるだろ」

彼女の言う通り、此処からさらにバスで 10 分も行けば、もっと大きな遊園地がある。

だが、あそこは平日でも混んでいるのだ。

「なるほど。私との楽しい時間をアトラクションの待ち時間で潰したくなかったんですね」

「……」

本当に察しのいい彼女である。

「では、そんなサトルの考えを無駄にしないためにも、今日は 2 人で思いっきり楽しみましょう。まずはあれに挑戦です」

エルゼが指差したのは、遊園地における定番の 1 つであるジェットコースターだった。

(失敗した……)

遊園地に着いて 10 分経たずに、俺は自分の選択を後悔した。

今の一言でもうわかったと思うが、俺は――

「さあ、早く行きましょう♪」

呆然と立ち尽くす俺を、エルゼが楽しげに引っ張っていく。  
俺の狙い通り、殆ど待ち時間なしでジェットコースターに乗る事ができた。  
しかも、1番前に。  
「1番前に乗れるなんて、ラッキーですね」  
「・・・」  
エルゼが何か言っているが、あいにく俺には応じる余裕がなかった。

\*

結局、ジェットコースターに2回、その他の絶叫マシンに3回乗ったところで、俺は限界を迎えた。  
「大丈夫ですか？」  
「あ、ああ・・・」  
エルゼの問い掛けに、力なく答える。  
現在、俺は彼女にベンチで膝枕され、頭を撫でられている。  
彼氏としては情けないが、後頭部に感じる太腿の感触が心地よい。  
「絶叫マシンが苦手なら、言ってくればよかったのに」  
「・・・俺にも意地があったんだよ」  
「ふふふ、男の子ですね」  
エルゼが少し呆れたような表情を浮かべる。  
「もう大丈夫だ。次はどれに乗る？」  
問い掛けながら、俺はエルゼの膝枕から起き上がる。  
少し名残惜しい気もしたが、ずっとあのままという訳にも行かないだろう。  
「そうですねえ、時間も時間ですし、そろそろお昼にしましょうか」  
「もうそんな時間か」  
エルゼの言葉を受けて確認すると、確かに時計は正午過ぎを指していた。  
「じゃあ、フードコートで何か・・・」  
俺が言い切るより早く、エルゼは肩に掛けていたバスケットから大きめのタッパーを取り出した。  
「それって・・・」  
「はい。私が手作りしたお弁当です。といっても、料理は苦手なので、簡単なサンドイッチですけどね。食べてくれますか？」  
「勿論だ」  
エルゼの問い掛けに、俺は一も二もなく頷いてタッパーを受け取る。  
蓋を開けてみると、色鮮やかなサンドイッチが綺麗に並べられていた。  
「いただきます」

「召し上がれ」

きちんと手を合わせてから、1番手前にあった卵サンドを頬張ってみる。

「どうですか？」

「美味しい！」

エルゼの問い掛けに、俺は声を大にして即答する。

本人は料理が苦手だと言っているが、決してそんな事はない。

これは間違いなく、時間を置いて食べる事まで計算して作られている。

味も俺好みで、非の打ち所のないサンドイッチだ。

「喜んでもらえてよかったです。遠慮せずに、どんどん食べてくださいね」

「ああ」

エルゼの言葉に頷き、俺は2つめのサンドイッチに手を伸ばした。

\*

「さっきは私が選びましたから、次はサトルが選んでください」  
サンドイッチを平らげたところで、エルゼがそんな事を言ってきた。

「わかった」

アトラクションを選ぶべく、周囲を見回してみる。

もう絶叫マシンには乗りたくないし……。

「じゃあ、あれにしよう」

俺が指差したのは、おどろおどろしい外観の洋館。

そう、これも遊園地の定番、お化け屋敷だ。

「ゴーストハウスですか。面白そうですね♪」

「……」

正直、少し期待したのだが、エルゼは全く怖がってくれなかった。

少し残念な思いを抱きつつも、彼女と共にゴーストハウスに入ってみる。

「なかなか雰囲気がありますね」

「そうだな」

ゴーストハウス内は未知のウイルスによって人々がゾンビ化した夜の街という設定で、両サイドの壁はたくさんの廃墟、足元には様々なガラクタや千切られたゾンビの腕（精巧な作り物）などが転がっている。

また、通路の先やセットのアパートからは不気味な呻き声や悲鳴が聞こえてくる。

「きゃあっ♪」

アパートの窓から巨大な緑色の腕が出現したのを見て、エルゼがわざとらしく悲鳴を上げて俺に寄り掛かってくる。

「ちゃんと守ってくださいね、私の騎士さん♪」

言葉とは裏腹に、全く怖がっている気配はない。

(まあ、エルゼらしいといえば、エルゼらしいけど)

そんな事を考えながら、ゴーストハウスの中を進んでいく。

直後、

『ウオオオオオオーツツ！！』

ふいにアパートのセットの陰からボロボロの服を着たゾンビが飛び出してきた。

人形ではなく、特殊メイクをした人間が扮するタイプのゾンビだ。

その手にはコンクリートブロックと鉄パイプで作ったようなハンマーが握られている。

「きゃあっ！？」

さすがに驚いたのか、振り向いたエルゼが可愛らしい悲鳴を上げる。

だが、

「うげええええ〜っっ！？な、何だ、こりゃ！？」

次の瞬間、何故かゾンビの方が悲鳴を上げていた。

しかも、明らかに演技ではない素の悲鳴である。

「ふふふ、ゴメンなさいね」

エルゼはペロツと舌を出しながら謝罪すると、そのまま俺の腕を引いて足早に歩き出す。

同時に、鼻に届く悪臭<sup>におい</sup>で、俺も何が起こったのかを瞬時に把握する。

おそらくエルゼが驚いた拍子に小さくオナラを漏らしたのだ。

音が聞こえなかったで少量だろうが、それでも彼女のオナラは強烈である。

事前情報もなしに吸い込んだら、悲鳴を上げてしまっても仕方ないだろう。

(運の悪い奴だな)

咳き込んでいるゾンビを肩越しに見ながら、俺は心の中で呟いた。

\*

「その、ちょっとお花摘みに行ってもいいですか？」

ゴーストハウスを出たところで、エルゼが少し申し訳なさそうに尋ねてきた。

「わかった。じゃあ、俺はあそこのベンチで待ってるから」

俺がそう言うと、途端にエルゼが不満げな表情を浮かべる。

「何を言ってるんですか。サトルも一緒に行くんですよ」

「はい？」

「私も限界なんですから、早く来てください」

戸惑いの声を上げる俺を、エルゼはトイレの方へと引っ張っていく。

「ちょっ、どう考えても俺が女子トイレに入るのは無理だろ！」

「女子トイレになんて行きませんよ。私たちが入るのは、こっちです」

そう言って、エルゼが俺を連れ込んだのは障がい者用のトイレだった。

確かに此処なら、男女で分かれてはいないが・・・。

「俺までトイレに連れ込んでどうする気だ？」

「ふふふ、本当はわかってるんでしょう？」

「・・・まあな」

溜め息を吐く俺を可笑しそうに見ながら、エルゼはスカートをたくし上げてブルマ型のカバー下着を露わにする。

「まだデート序盤ですし、このままガス抜きしましょう」

そう言いながら、エルゼが前のめりになって俺の方へ尻を突き出してくる。

「んっ♪」

そのまま彼女が軽くお腹を押した直後、

**フシュウウウウウウ・・・。**

形のよい尻から本日3発目のオナラが放たれた。

場所を意識したのか、殆ど音のしないすかしっ屁だ。

とはいえ、

「ふぐうっ!？」

悪臭は凶悪そのもので、少し離れて立っている俺の鼻にも容赦なく襲い掛かってくる。

昼食に卵サンドを食べたからか、濃厚な腐卵臭だ。

「ほら、サトルもそんな所に立ってないで、もっと近くに来てください」

「・・・わかった」

彼女のオナラに付き合うのも、彼氏の義務だろう。

(よし!)

覚悟を決めて、彼女の尻の前にしゃがみ込む。

すると、

**もにゅっ。**

すぐにエルゼが俺の顔に自分の尻を押し付けてきた。

そして、

**シュオオオオオオオ・・・。**

先程と同じようなすかしっ屁を浴びせてくる。

「むうっ!？」

間を置かず、濃厚なチーズのような悪臭が俺の鼻に流れ込んでくる。

だが、俺も伊達にエルゼの彼氏になった訳ではない。

今のカバー下着を穿いている状態なら、彼女のオナラにも何とか耐えられるようになったのだ。

「ふふふ、さすがですね、サトル。普通の人なら、最初の1発で気絶しちゃいますよ。んんっ♪」

プシュウウウウウウ・・・。

嬉しそうに言いながら、さらにオナラを浴びせてくるエルゼ。

「んむうっ!？」

やや大きめの、風船が萎むような音のオナラ。

それが山盛りの肉を腐らせたような悪臭を伴って俺の鼻に襲い掛かってくる。

(もしかして、これって・・・)

オナラの悪臭においに悶絶しながらも、俺の頭にある仮説が浮かぶ。

「次で最後ですよ。んんっ♪」

フスウウウウウウ・・・。

「むぐうっ!？」

今度は腐った肉とレタスを混ぜて濃縮したような悪臭においだった。

間違いない。

卵サンド、チーズサンド、カツサンド、ハムレタスサンド・・・エルゼはさっき昼食で食べたサンドイッチを意識してオナラを出しているようだ。

「ふう、お疲れ様でした」

大きく息を吐いて、エルゼが俺を解放する。

「ガス抜きも終わった事ですし、次は何に乗りましょうか？」

「その前に、此処をこの状態で放置して大丈夫なのか？」

そう、トイレ内はエルゼが放ったオナラの残り香が充満している。

このまま放置すると、次の利用者にまで被害が及んでしまうのは想像に難くなかった。

「それについては、ちゃんと考えてありますよ」

そう言うと、エルゼはバッグから取り出したスプレーを周囲に噴射し始める。

「何だ、それ？」

「強力な消臭スプレーです。これを撒いておけば、このぐらいの悪臭においは簡単に消してくれるんです」

彼女の言う通り、トイレ内に漂っていたオナラの残り香がみるみるうちに薄くなっていく。

「凄い効果だな、そのスプレー。何処で買ったんだ？」

「知り合いが作ったのを貰ったんです。その人も、私と同じでオナラが好きなんですよ」

「そうなのか」

どうやら「類は友を呼ぶ」という言葉は本当らしい。

「このぐらい撒いておけば、大丈夫ですね」

エルゼがスプレーをバッグの中に戻しながら言う。

確かにトイレ内の<sup>におい</sup>悪臭は完全に消えていた。

これなら被害者が出る事はないだろう。

「では、改めて行きましょうか・・・と、その前に」

「まだ何かあるのか？」

ドアの方へ踏み出した足を止めて問い掛ける。

「お花摘みです」

「まだ出・・・っ！」

言い終えるより前に、エルゼのデコピンが額にヒットした。

「今度は本当のお花摘みですよ」

「・・・外で待ってる」

それだけ告げて、俺は返事を待たずに障害者用トイレを後にした。